

# 現在巴

シテ 巴

ツレ 寄手の兵

ワキ 源義仲

ツレ 今井兼平

ツレ 立衆

所 近江栗津

次第 「淵は瀬となる飛鳥川。く。早きや報なるらん。

義仲 「これは木曾義仲なり。我いやしくも弓馬の家に生れ。君に仕ふると申せども。

シテ義仲 「平家は既に世を取つて。く。二十余年の春の花。秋の紅葉と栄えしに木曾の山風吹き下し。我身の運を開けしに。みだれがはしき世の中は。唯身の程ぞ恨なる。く。

義仲 「皆々かう来り候へ。如何に巴。これ迄参る事神妙なりさりながら。今日は義仲が最期にてあるぞ。いづ方へも落ち候へ。

シテ 「これは仰にて候へども。君には片時も離れ参らせず候。今此際に御暇とは巴を未練者と思召し候か。

義仲 「いや其儀にてはなし。義仲は最期迄女武者をつれたりと。他の人口も憚なれば。急いで落ち候へ。

シテ 「御詞をかへすは恐なれども。御最期の際となりて。

他の人口もいるまじや。同じ枕に討死して。二世の御供申すべし。

義仲

「実にくそれはさる事なれども。誠の心あるならば。形見を持ちて古郷へ帰り。様かへ跡弔ひ申すべしと。

地

「涙にむせび宣へども。理や古郷を。出で、越路の道迄も。巴は命ながらへて。今此際に成りぬれば。落ちよと仰せ候は。情なの御事や。何れの国の果

迄も。命のあらん其程は。御供に参るべし情なの今の御諛やな。時刻うつりて叶ふまじ早々帰れ帰れとて。座敷を立たせおはしませば。力なくして巴は。行くも行かれぬ御名残。涙にむせぶばかりなり。く。

ワキ立衆

「よせかくる。汀の波のおのづから。音も烈しき。夕嵐。

シテ

「抑これは木曾殿の御内に。其名を得たる女武者。

今日を限の軍ぞと。寄せ来る勢をぞ。待ちかけた  
る。

地「敵はこれを見るよりも。く。あれは巴か女武者。あますな洩すな討取れとて。我もくと進み  
けり。

シテ「一騎当千の秘術をつくし。

地「一騎当千の秘術をつくし。ふせぎ戦ひ追払ひ。討  
たるゝ者は数を知らず。唯一人に斬りたてられて

続く兵なかりけり。

ワキ「爰に武蔵の住人に。

地「恩田の八郎師重とて。巴に組まんと飛んでかゝる  
をわだがみつかに引寄せて。首ねぢ切つてぞ捨  
てにける。

シテ「今は巴もこれ迄なり。

地「今は巴もこれ迄なりと長刀追つとり駒引きよせ  
て。ゆらりと打ち乗り木曾の浅ぢふかけし中の。

由なかりける契の末ぞと行方も知らず成りにけり。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『古今謡曲解題』丸岡桂 著  
『四流対照 謡曲二百番 上巻』芳賀矢一 訂